藪塚の**人の賑わいが町に滲み出る空間構成を再解釈**し、
小学校設計に落とし込むことで、
子どもたちや地域住民の郷土愛を育み、
将来的には、訪れる人々に、
この町へのシビックプライドが生まれることを願う。

01 敷地背景

今回の敷地は群馬県太田駅から、電車で 10 分ほどにある藪塚町である。
だが、**町の構成は同じ市とは思えないほど異なる**。



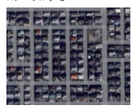
藪塚





道が**家と家を繋ぐ役割**

太田駅周辺





道が**交通手段として機能**している

太田駅周辺で進む都市化の風が藪塚にも吹き込もうとしており、
地域固有の文化や郷土愛が揺らぎ始めている。
そこで藪塚の人の賑わいが町に滲み出る空間構成の起源を辿った。

古地図比較

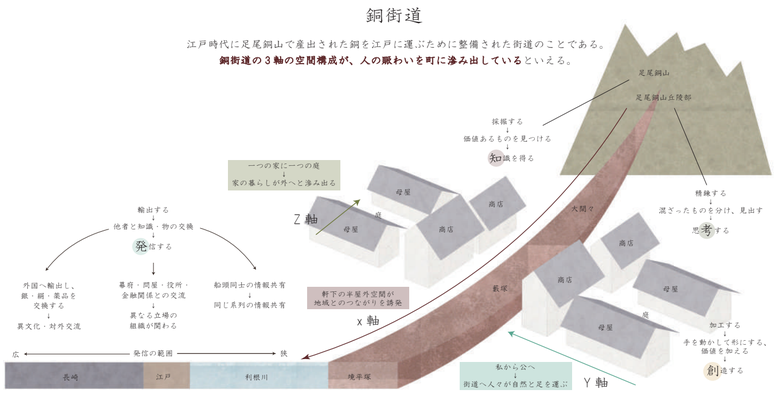
古地図を比較すると、一本の道だけが、通り続けていることがわかる。
現在もその構成は保たれ、周囲に住宅が広がった今でも、道に沿った街並みのかたちは変わっていない。
この道は現在、県道 69 号と呼ばれ、かつては銅街道と呼ばれていた。



1894-1915　1928-1945　1972-1982　1988-2008　現在

銅街道

江戸時代に足尾銅山で産出された銅を江戸に運ぶために整備された街道のことである。
銅街道の 3 軸の空間構成が、人の賑わいを町に滲み出しているといえる。



現　藪塚本町小学校

周辺敷地には、畑・高齢者施設・閉店した 3 つの商店・中学校・幼稚園と**様々な地域と接点が持てる場所がある。**







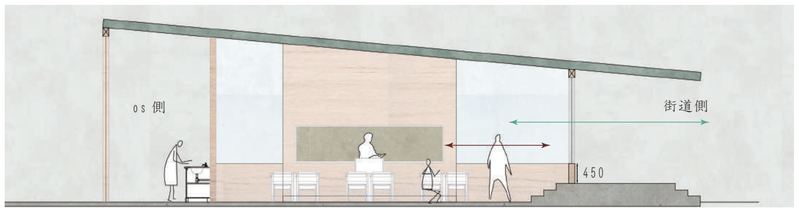


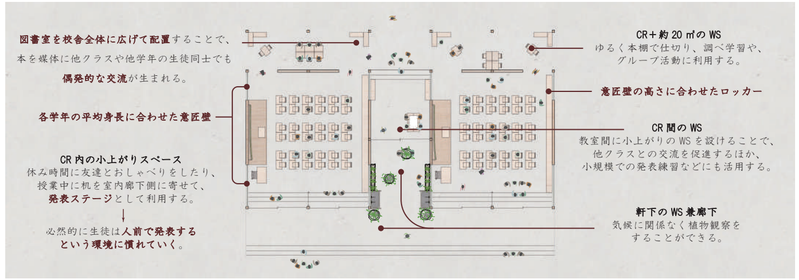




03 教室詳細

段差によって**空間の違いを分けるために、全 CR GL-450 下げる。**
また、**座学中は街道側に視線が通らず、立って動的な活動を行う際に視線が通る**ように、
着席時の目線平均高さ -450 の高さの意匠壁やロッカーを設置する。





	平均座高		椅子座面高さ		着席時目線高さ			壁高さ
1 年	65cm		28cm		93cm			48cm
2 年	68cm		30cm		98cm			53cm
3 年	70cm	＋	32cm	＝	102cm	−450	＝	57cm
4 年	73cm		34cm		107cm			62cm
5 年	75cm		36cm		111cm			66cm
6 年	78cm		38cm		116cm			71cm

低学年 CR 総合型教室（67 ㎡＋20 ㎡）/ OS

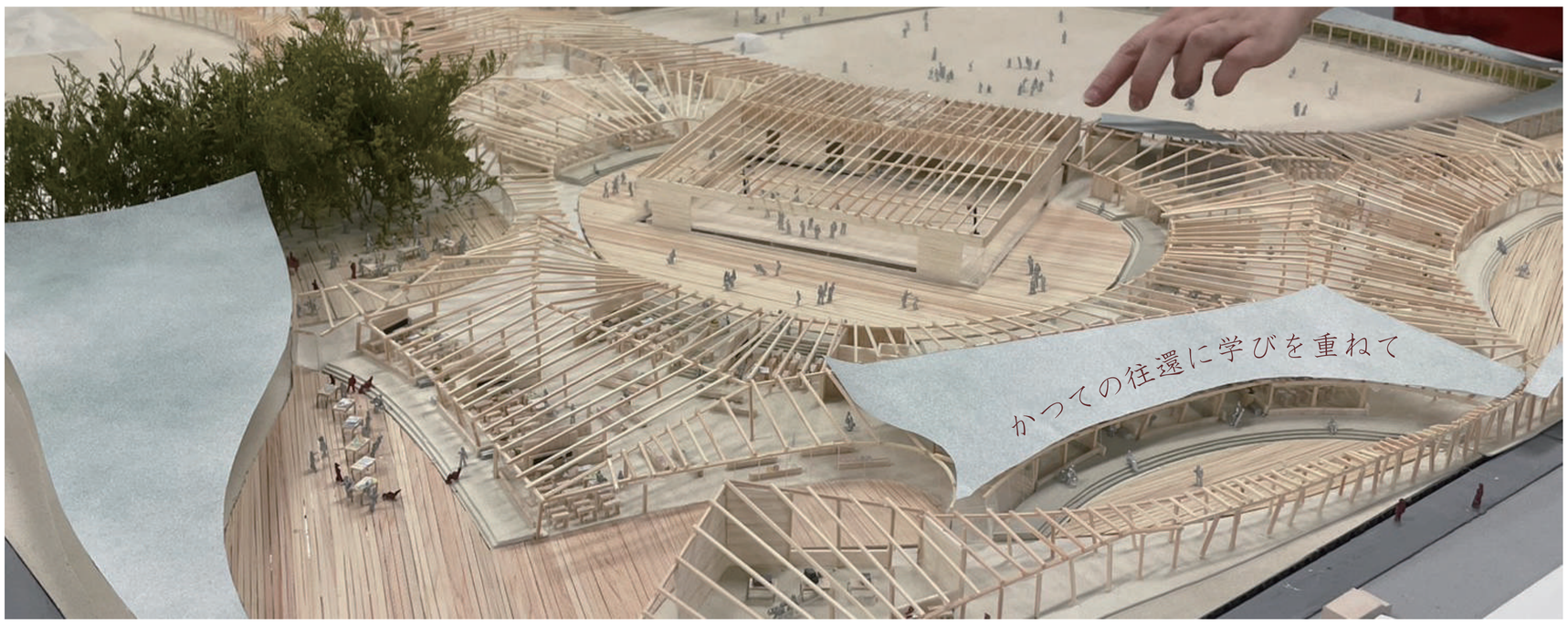
低学年は図工なども教室内で学習するため、**CR と廊下の間の仕切りを可動式とし、教室内の大きさを可変できる**ようにした。
また、**水道を各クラスの固定部分に設置することで、ワークスペースとして利用しやすい CR 空間**とする。
また OS では小上がり兼本棚を設け、小ステージとしても使うことが出来る。

中学年 CR 特別型教室（67 ㎡＋20 ㎡）/ OS

中学年は自己効力感の育成期であるため、**空間を変える学びを促進させるために、**
4 方向にカーテンを付けて CR 内を最大 4 つにしきれるようにする。
また、OS では体育館が近いことから目線を遮らないように小上がりの本棚を設ける。

高学年 CR 教科教室型教室（67 ㎡＋20 ㎡）/ OS

高学年は自己決定・探究の実践期であるため、**空間を遮ぶ学びを促進させるために、教科教室型**にした。
教室間にロッカーや机を設置し、他クラスや他学年との関わりを促す。
また、廊下兼 OS では各教科教室の教科に関する本を置き、科目の学びを促進させる。



02 設計計画

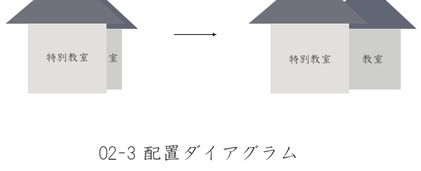
02-1 往還の再解釈としての建築

銅街道の空間構成を分析したことで、**商店の後ろに母屋が配置されており、庭が隣接していることが、**
街道に人々の活動が滲みやすくなっていることがわかった。
銅街道の空間構成を再解釈し、小学校設計に置き換えていく。

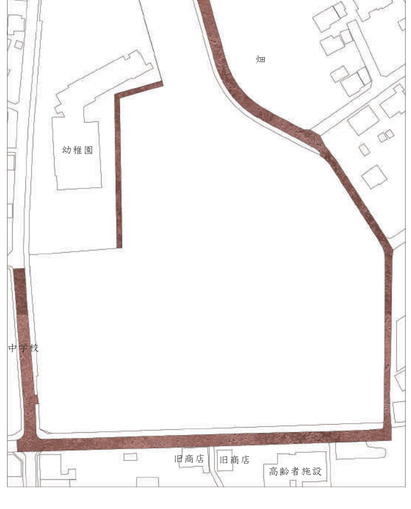
商店→特別教室　　母屋→教室

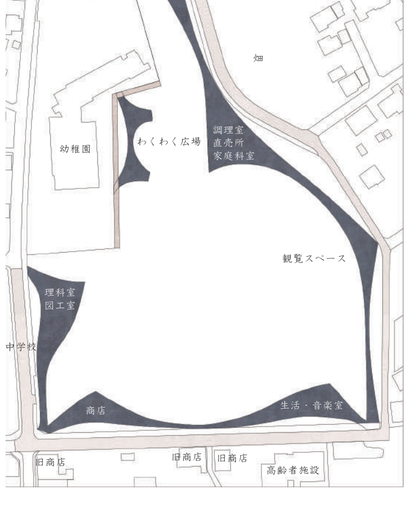
02-2 より活動が滲み出る空間構成

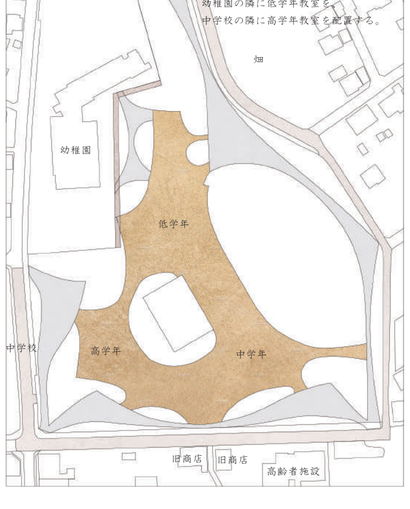
銅街道は、商店の真後ろに母屋が配置されている。
より人々の活動を街道側に滲み出るようにするため、**教室を真後ろに配置するのではなく、わずかにずらして配置**する。



02-3 配置ダイアグラム









04 配置図兼 1 階平面図　1:500



増田悠乃　23FA121@ms.dendai.ac.jp